優秀賞

命を守るシートベルトとヘルメット

明治学園小学校　６年　野入　桃子

救急車のサイレンが鳴り響く。慌ただしく降ろされたストレッチャーと共に救急外来の自動ドアが開く。患者さんは交通外傷の子ども。頭から血を流し、首には固定用のカラーが巻かれ、一刻を争う事態だ。救急隊員から報告を受けながら患者さんを処置室へ運ぶ。
「なお、ヘルメットは未着用でした…。」

私の母は看護師だ。救命救急外来勤務の経験もある。搬送されてくる患者さんは様々。中でも交通外傷は「悲惨」だと話してくれた。

車同士の衝突事故による外傷は、身体のあらゆる箇所が骨折していることがある。大人でも「痛い！痛い！」と泣き叫ぶ人もいるらしい。心電図モニターをつけ、点滴をするための血管確保をして、採血が済んだら点滴をつなぐ。呼吸状態が悪ければ気管内にチューブも入る。おしっこの管を入れることもあるそうだ。想像しただけで私は怖くて恐ろしい。

母から聞く「交通事故による悲惨な症例」の原因、そのほとんどは「未着用」だ。
「ヘルメットなしで自転車に乗っていた」
「後部座席でシートベルトをしていなかった」
など、安全確保を欠いたもの。子どもは特にこれに当てはまる。もしも後部座席でシートベルト未着用だと、衝突の衝撃でフロントガラスに飛ばされることがある。また、自転車で衝突転倒した際は、頭部に受けるダメージが命に関わる致命傷となることも多いそうだ。

交通事故のない、安全な社会づくりが、私達の理想である。けれど、もしも事故にあってしまった時、少しでも命を救えるように、私達には出来ることがある。それが、「シートベルト着用」と、「ヘルメット着用」だ。命の現場で必死に命を救う人達がいる。運転をする側の私達も、大切な命と真剣に向き合い、それを守る義務があるはず。かけがえのない尊い命を守り救うのは、あなた自身の行動だ。